

齋藤 節子

十月十一日、本州をすっぽり飲み込むほど大きな台風が東京に近づいていた。夜になると暴風雨は激しくなり、眠らない街、新宿の歌舞伎町も人通りがなくなった。

その日、比呂志は一週間前に借りたばかりのアパートにいた。その二階建ての古びたアパートは新大久保の神田川沿いにあった。階段を上がると雨に濡れた六つのドアノブが通路灯の光で輝いていた。しかし、灯りがもれている部屋は一番奥の部屋だけだ。テレビも家具もなにもない殺風景な部屋に比呂志のうめくような低い声が激しい雨音と重なり合っていた。

「俺は後悔していない。池澤が生きている限り、奴の存在自体が俺たちを苦しめた。そうだろう。真利子」と叫ぶ比呂志の声は悲しかった。そして軋んで閉まらなくなった風呂場のドアが、強風にあおられる度に激しくギーンと鳴きながら揺れていた。

比呂志はむっくり立ち上がると、じつと風呂場を覗みつけた。そこにはビニールシートに包まれた池澤の死体がある。風呂場のドアが何度も青いビニールシートにあたっては鈍い音を上げていた。

やがて裸電球がパチパチとチョートしたような音を出すと同時にアパートは闇に包まれた。

「なにも見えないじゃないか」と比呂志は言いながら手探りで寝袋を探しあてた。そして、シャワシャワと音を立てながら寝袋にもぐりこむと、寝袋のファスナーを上げた。

暗闇の中に青白い炎が上がった。

その炎の中から池澤の顔がはつきりと窓ガラスに映った。池澤の魂が肉体から完全に離脱し比呂志の周りを彷徨いはじめたのだ。比呂志は思わず、「ウオー」と叫び声をあげると、ファスナーを震える手で思い切り上げ、身を丸めながら頭を寝袋の中に沈めた。

しっかりと上げたファスナーが静かに開けられ、池澤の冷たい手が比呂志の首をつかんだ。

「よせ、消えろ！」と比呂志は叫んだ。池澤を払いのけ

ようと寝袋の中の両手がバタバタと激しく動いた。

比呂志は、ほんとうに池澤が死んだのか確かめたい衝動に駆られたが覗き見る勇気がなかった。

結局、黙ったまま生臭い血が染み込んだ爪で体中を掻き毟りながら夜を明かすことにした。

翌朝、ほんのりと薄明かりがさしてきたが、雨はまだ降り続けていた。どうもすっきりしない天気には比呂志は渋い顔をして天を仰いだ。

昨日のうちに死体を菅平の別荘に運べなかったことを比呂志は悔やんでいた。計画を邪魔した台風にもらむらと怒りがこみ上げてきた。今日こそ、池澤の死体を別荘に運ぼうとポケットから携帯をとおりだすと台風の被害状況を調べた。長野県にある犀川の氾濫はまだ治まらず道が寸断されたままだ。

「これでは今日も菅平にある別荘には行ける状況ではない」と口走ると、比呂志は風呂場に行こうとしているビニールシートの包みを何度も強く蹴った。

蹴りつかれた比呂志は額にうつすらと汗をにじませていた。そして何度か舌打ちをすると、黒のシヨルダー

バックをいつものように肩にかけた。

比呂志は薄手のコートの襟を立てると、何食わぬ顔で部屋を出た。外はまだ風が吹き荒れていた。時折、傘がひるがえるような強風が吹いて、プラスチックのケースや発泡スチロールの箱が飛び回り、道路の真ん中をまるで車のように走り去っていく。そんな中を比呂志は駅までの道を幾度も立ち止りながら歩いた。そして、新宿と逆方向の高田馬場駅に着いた。新大久保の駅でなく、高田馬場にした理由はこれと違ってなかった。

あるとしたら、昔この近くに住んでいたせいで早稲田大学がある高田馬場に足が向いたのだろう。

台風の影響で止まっていた山手線は八時過ぎには、動いていた。比呂志は切符を買い電車に乗り、東京カルチャースクールのある新宿で降りた。

十時には、まだ時間があつた。だが、八王子の家に帰ってまた、ここに戻るほどの時間は無かった。比呂志はしばらく超高層ビルの谷間を強風にあおられながら歩いて時間をつぶした。

小説実践クラスのある東京カルチャースクールへ比

比呂志が行くようになって四年になる。このクラスから世に出た作家も多く、受講者は志のあるものがほとんどだ。それが比呂志には居心地よく、飽きもせずに通っている理由の一つだ。

十月十二日火曜日、この日は秋学期の開講日だ。

比呂志はその日を楽しみにしていた。それは受付でもらうテキストに受講生の作品が載っているのだ。それを読むのを心待ちにしていた。

比呂志はパラパラとページを捲りながら受講生の作品に目を通し始めた。いつもと同じ顔ぶれの小説が続くと比呂志の小説が出てきた。

今回が連載の最終章だった。それを軽く目を通すと比呂志は自作に満足した笑みを浮かべた。

比呂志は教室までの廊下を歩きながら、このテキストを読むのが好きだった。それは学生だった頃、同人雑誌に池澤や真利子の書いた小説を読む時のワクワクした気持ちとどこか似ていたからだ。

「おはようございます。田村さん、テキストもつ、お読

みになりました？」と、比呂志を追い越すように駆け寄ってきた同じクラスのすぎ子が声をかけてきた。

「おはよう。今、読んでいるところですよ」

「辛沢さんって、誰のペンネームがおわかりになる？」

「まだ、見ていないけど夏学期に新しく入ってきた人じゃないの？」

「その方はご自分の名前で書いているのよ」

「誰だか分からなくてもいいじゃないか」

「田村さんも知らないのね。私はなんだかすごく気になるわ。とにかく、読んでみて」

「そうなの。その作品は終わりのほうだね」と比呂志はページを捲った。

「そう、最後よ」と、すぎ子がテキストを覗き込んだ。

「これか！」

比呂志は自分の眼をおもわず被いたくなった。ゴシック体の太字で印刷された文字が比呂志を襲った。

『死体処理、請け賜ります』 作者は辛沢 喬

よりによって、こんな小説に朝から出くわすとは、比呂志はむくむくと怒りが込み上げてきた。

そんな比呂志の気持ちを見無視するかのようになり、すぎ子は早く読んでくれと言わんばかりに話しかけてきた。

「とつても面白い作品なのよ。今までになかったタイプなのよ。田村さんも読めば、だれが書いたか知りたくなるわ。読んでみて」

「ああ……」と、比呂志はすぎ子に面倒くさそうに応えた。

そして、すぎ子は立ち止る比呂志を置き去りにして教室の中へと入っていった。

比呂志は忘れかけていた池澤のことを思い出し、冷や汗がじわじわと脇の下を濡らしはじめていた。

「死体処理か……」と咳くと、比呂志は煙草がどうしても吸いたくなくなった。

そして教室に入らずに喫煙室へと歩き出した。

比呂志は煙草に火をつけると、深く吸い込んでゆっくりと煙を吐いた。それから立て続けに吸うと、すぎ子が話した作者不明の小説を読み始めた。

『死体処理にお困りの方は「<http://www.HANDLE>」

CORPSE101204.com」のウェブサイトアクセスすれば、その日のうちにお伺いします。突然、舞い込んだこんなメールにはご注意ください！

日ごろから殺意をお持ちのあなたは特にご注意ください。それはこのサービスがすばらしく充実したもので、

ご依頼人様を充分満足させるものだからです。

死体処理サービスとは

独自の方法で死体は完全に処理いたします。

秘密厳守です。

料金は現金でお支払いいただけます。

詳しい内容はサイトをご覧ください。

あなたはまもなくご依頼人になるでしょう。

私はこのメールを読み終えるなり、迷う事も無くアクセスした。それは、憎いあいつを殺そうと考えていたからだ。

十月十一日

私は、とうとうあいつを殺した。こんなにもあつけない

殺す事ができるとは思ってもみなかった。あいつは殺

されることを望んでいるかのように死んでいった。

新宿で酒を飲んで、新大久保の借りたばかりのオンポロアパートに連れて行き、あいつの首をしめて殺した。

それから私は夢中で、あいつの口、鼻、耳、そして肛門にしつかりと脱脂綿をつめ、そこをガムテープでふさいだ。そして、まだ温かい死体を二つに折り曲げてシートに包んだ。それを更にビニールシートでしつかりと巻いてガムテープを二重にまわした。

これで、後は引き渡すだけになった。

ドアを叩く音がした。ドアを開けると黒いサングラスをかけて、作業服を着た男が二人立っていた。彼らは黙って部屋に入ると請求書をみせた。

私は予め用意した百万円を支払うと、彼らは手早くダンボール箱を作り、死体を入れた。彼らは、ここに来て三分もしないうちに死体を運びだした。私はあまりの手早さに、ほんとうに“池澤”を殺したのか信じられなくなった。』

比呂志は「池澤」の二文字に愕然とした。

ワナワナと体が震え出して止まらなくなると、慌てて喫煙室を飛び出した。

そして、新大久保のアパートに黒のコートをひるがえしながら夢中で走って戻った。

比呂志は激しく息を乱しながら、部屋のドアを開けた。そして風呂場にころがっているはずの青いビニールシートの包みを探した。

「ない。死体がない……」

池澤の死体を包んだ青いビニールシートは忽然と消えている。

茫然と立ちすくむ比呂志は、右手に握り締めていたテキストをその場で開いた。そうしなければいけないほど、混乱していた。

そして、次のページを捲くると続きを食い入るように読みはじめた。

『十月十二日

私はシアトル行き of 飛行機に乗るために成田国際空港の第一ターミナルにいる。

ノースウエスト9便、出発時刻は十九時だ。

まだ、待ち合わせ時間まで三十分ほどあった。私はコーヒーを飲みながら、彼女が来るのを待っている。

真利子はシアトル行き航空券を一枚しっかりと手にしながら、待ち合わせ時間の十七時にスターバックスに現れるはずだ。

僕は死体処理を頼んだおかげで、池澤を殺したことが嘘のように頭から消えていた。こんな馬鹿げた商売があるなんて信じていなかったが、あの日、突然届いたメールから僕の計画はここまでミスなくできた。

これで日本をしばらく離れていれば、ほんとうに何もなかったかのような日々がやってくる。僕は頬杖をつきながら、コーヒーをすすった。

比呂志は読みながら笑い出した。それも噴出すように大きな声を出して笑い出した。

しばらく比呂志は笑い続けると、テキストを壁にむかって勢いよく投げつけた。

そして「なんだ。こんな小説」と怒鳴り声をあげた。も

う、あの笑い声はどこにもなかった。

がっくりと肩を落とした比呂志は、遠い記憶を呼び起こし始めた。

二

三十四年前、真利子、池澤、そして比呂志の三人は早稲田大学文学部の学生だった。彼らが学生時代を過ごした一九六八年から七十二年は学生運動が激化し、授業も休講が続ぎ、多くの学生たちは時間を持って余っていた。

その年の入学式は、新入生への部活やサークルの勧誘の看板よりも学生運動の看板がでかでかと並べられていた。東大安田講堂の（70年安保）事件を引きずっているかのように緊張した雰囲気漂っていた。

しかし、新入生の彼らはいくまで新入生らしくサークルや部活の誘いに胸を弾ませていた。

「池澤、午後の講義は休講だから文芸サークルに行ってみないか」と比呂志は学食のラーメンを食べながら池澤を言った。

池澤も比呂志もすでに高校のときから文芸雑誌に投稿していたので、このサークルに拘りはなかった。しかし、比呂志は文芸サークルの真利子に誘われて、その気になつていた。

「おまえ、あのサークルに入るつもりでいるのか」と池澤は比呂志をたしなめた。

「ああ、誘われたんだ」と比呂志はテレながらこたえた。「やつぱりな」と池澤は突き放すように言った。

「池澤、おまえも真利子に誘われたんだろ？」

「いや、彼女はなにも言わない」

「そっか・・・」

比呂志も池澤も黙つたままラーメンの汁を飲み干した。

真利子は凜として、大きな切れ長の瞳とストレートの輝きのある黒髪を肩で切りそろえ、長身ですらつとしていた。そんな彼女の周りには男子学生の親衛隊が常についていた。当時の早稲田は女子学生がまだ少なかったし、モデルのようなスタイルの学生は真利子しかいなかった。

そんな真利子は、文芸サークルで慶応や東大の学生からも原稿を集めてくるほど活動的で、サークル活動に熱心

な女子学生だった。

そしてロシア系の血をひく池澤は彫が深く、瞳もブル―がかつていて、背も高く真利子と並んで歩いても見劣りする事も無く。それはまさに美男、美女のカップルに映った。

新学期がはじまり四月の下旬には、彼らは文芸サークルで活動するようになっていた。そして早稲田文学という伝統を受けつぐように文士に憧れ、同人雑誌を作ることに夢中になっていった。

比呂志は憧れの真利子に引きずられるようにサークルに入り浸つていったが、池澤はたまに部屋に顔を出しては、頭の悪い評論家の口調を真似して真利子が集めてきた原稿を貶した。

そんな池澤だが彼の書いたものは、なぜか人を弾き付ける力強さがあった。

真利子は彼の小説を読むたびに、こう言って池澤を褒めた。

「かならず、芥川賞や直木賞をとれる作家になるわ。池

澤くんなら・・・」

たしかに真利子だけでなく比呂志も、池澤の小説に可能性を感じていた。

しかし、惚れ込んだように池澤を褒める真利子を見てみると、比呂志は胸が切なくなった。容姿も小説も池澤にかなわない悔しさを噛み締めた。

彼らが三学年の秋、革マル派が部室を荒らした。

真利子が中央大学の学生からもらった原稿がどうも怪しかったのか？ほんとうのところは誰にもわからないが、この事件をきっかけに彼らの活動場所が大学から遠く離れた八王子の比呂志の実家になった。

当時の八王子は、駅の周りは閑散として、甲州街道沿いに昔からの宿場町として栄えた商店街があった。

そして、雑木林や畑がそこを囲むように広がっていた。今日のような市街地に広がる丘陵にたくさんの大学が次々と移転してくるなど思ってもみなかっただろう。

とにかくあの頃は、畑や雑木林がいたるところにあった。比呂志の実家は甲州街道沿いにあり、昔からの八王子の豪商で、瓦屋根には鬼瓦はそそり立ち、白壁がどこま

でも続く大きなお屋敷だ。そして、京都から庭師を呼び寄せて造った庭園があった。まるで花鳥山水を楽しむような広い庭を母屋と挟むようにして、離れ屋があった。その離れ屋は、まるで老舗旅館のような格調高い床の間のある広めの部屋と十畳ほどの和室が続いていた。それらの部屋を仕切る欄間がこの家の歴史を司るようになっていた。そして二階は廊下にくるりと囲まれたかなり広い洋室が一部屋だけあった。廊下には昔ながらの木枠で出来たガラス戸が寸分の狂いも無く填まられていた。ここからの眺めはとくに素晴らしかった。

彼らはこの離れをなんの気兼ねも無く使う事が出来た。もちろん真利子も池澤も、ここがとても気に入って、卒業するまで大学の部室に戻ることはなかった。

真利子はこの二階の洋間が特に気に入っていた。そして夏休みには、泊りがけでやってきた。

「ねえ、田村くん、ここで小説を書くところだ、書いてよ」

「それならずと居ればいいさ」

「ほんとうにいいの」

「池澤もそう言っつて、先週、泊まっつていったよ」

「池澤くんも泊まっつたの？それほんとう」

そう言っつた真利子の顔がほっつと赤くなっつた。

そして夏休みが過ぎると真利子と池澤はいっしょに泊まることが多くなっつていった。しかし、それは同人雑誌の締め切り日前に何日か泊まるだけだっつた。

結局、彼らは四年間で八刊の同人雑誌を発行できた。そのほとんどがこの離れ屋で作っつたものだっつた。

そして大学を卒業すると比呂志は親が薦める銀行に就職し、真利子は雑誌社で働く事になっつた。しかし、池澤だけは就職が決まらずにいた。比呂志はそんな池澤に「就職先に拘りすぎだ」と意見した。

池澤の両親は彼が生まれて直ぐに離婚したことや、彼を引き取っつた母親は池澤が五歳のときに彼を捨てて、家を出て行っつてしまっつたことなど、比呂志は池澤の暗い生い立ちをみんな知っつていた。それが池澤を苦しめていたことも分かつていた。高校生から一人暮らしをしていた池澤がはじめて心を開いた同級生の比呂志に話したことだ。だからこそ、比呂志は自分のことのように池澤の

就職が気になっつてしかたなかつつた。

「俺は就職先を拘るよ。おまえのように割り切れない。

俺は俺流で行くよ」と池澤は比呂志を無視して答えた。

「じゃ、就職しないでどうするんだ」

「どうにかなるさ。お前は俺のことなど気にしないで、先に行っつてくれよ」と悔しさを隠すように言い放っつた。

比呂志はそんな池澤に淋しさを感じながら、高田馬場駅で別れたままになっつた。それから、二週間が過ぎた夜に真利子から比呂志に電話がかかつてきた。

「ねえ、池澤くんに連絡がつかないのよ」

「池澤がいないのか？」

「もう、二週間になるのよ。まっつたく連絡がつかないのよ」と言っつ真利子の声は涙声になっつていた。

池澤は二人に何も告げずにアメリカに旅立っつたのだ。それは、ちょうど四月はじめの新社員の研修が終わっつた頃だっつた。

真利子はしばらく池澤からの連絡を待っつていたが、一年も経たずに比呂志からのプロポーズを受けると結婚をした。それはあまりに電撃的な結婚だっつた。経緯はど

うあれ、比呂志は真利子と幸せな家庭を築き始めていた。そして真利子も幸せな家庭の主婦におさまり、池澤は真利子の心から消えていた。

三年の歳月が過ぎたある日、池澤がアメリカから帰国したのだ。

池澤は帰国後、しばらくブラブラしていたが、一九八〇年に「蒼の喪失」で文学賞をとった。

それを読んだ真利子は「比呂志さん、許してください。私は彼のことを今でも愛しているの。どうしようもなく好きでたまらないの……」と比呂志に告げると家を出て行ってしまった。

比呂志は真利子が出て行くのを黙認した。それは、池澤の書いた「蒼の喪失」を比呂志も読んだからだ。

恋人を捨ててアメリカに旅立った主人公が、彼女を忘れることができなくて日本に戻ってきたら、親友と結婚をしていた。そして主人公は人妻となった恋人を想い続けるというよくある話を書いた小説だった。

しかし真利子にしてみれば、それは間違いなく池澤からラブレターに思えた。そして池澤は文学賞だけでなく

真利子までも比呂志から奪い取った。

だが真利子は家を出て一ヶ月も経たないうちに比呂志のもとに戻ってきたのだ。それは比呂志の子供を妊娠したことが分かったからだ。

「私、中絶することなんてできないわ。でも、彼を失いたくないの。どうすればいいのよ」真利子はなんでも受け入れる比呂志にすがりついた。そして、真利子は池澤も比呂志の子供も失いたくないと泣いて頼んだのだ。

考えたあげく比呂志は、学生時代に過ごした離れ屋に三人で暮らすことを提案した。意外なことに、この提案を池澤も賛成し、奇妙なトライアングルの生活が始まった。

「田村は俺を許せるのか？」と池澤は引越してきた晩に比呂志に訊いてきた。比呂志はその質問をそのまま池澤に返した。確かに真利子を奪った池澤は許せないが、比呂志も池澤がいない間に真利子と結婚した負い目があった。

だが、真利子はそんなことなど思いもせず、ただ大學生だった頃のように二人から愛される生活が出来る

と、この生活に踏み切ったのだ。池澤は真利子を失いたくないと思い、そして比呂志もまた、池澤と真利子を失いたくないと思っていた。

だが、三人の関係は学生の時のようにいかなかった。それでもそれなりに生活を続けた。それなりとは、理想とかけ離れているが理想とまったく異質のものではない生活だ。それが比呂志と真利子のあいだに生まれた息子の真琴が成長するにつれて、生活は思いもよらない方向へ進んでいったのだ。離れ屋の暮らしは三人にとって耐え難いものとなっていった。

「真琴、やめるんだ。いいか。真利子はおまえの母親だ。母親をなぐっていいと思っているのか」

「違う。あんな女、母親なんかじゃない。最低な女だ」

「憎むなら、父親の俺を憎め」

「お父さん、それは違う。僕の気持ちを何も分かっていないくせに」

「分かっているよ。こんな生活が真琴にとって、いいわけないことも充分わかっているよ」

十三歳の真琴が、真利子に暴力をふるうようになった。そして池澤は真琴の態度に耐えられずに外泊するようになっていった。

比呂志の脳裏にあの狂ったように暑い夏の日のごとく鮮明に甦ってきた。

「裏切りは絶対に許さないわ。なんで、そんな女のところに行くのよ。真琴は、もういないのよ。あなたが嫌いな悪魔はもうこの家にはいないのよ。お願い行かないで、私を一人にしないで・・・」と叫びながら、真利子は全裸で池澤を追いかけてまわっていた。追いつがる真利子を池澤は何度も足蹴にしながら、広い庭を逃げ回るようにして裏口から出て行った。

その様子を比呂志はじっと見ていた。そして十五歳になったばかりの真琴を悪魔呼ばわりした母親の真利子を哀れに思った。この時、比呂志はこの離れ屋から逃げだしていく池澤にやっとな勝てたと思えた。

「結局、池澤は真利子から逃げ出したんだ」と呟く比呂志に笑みがこぼれた。

真利子は池澤が出て行ってしまつと、吹っ切れたように落ち着きを戻したように見えたが、この平穩な日々はながくは続かなかつた。真利子がうつ病にかかり、比呂志は彼女の世話に追われ、結局、真琴はアメリカの大学を卒業するまでの十年間、一度も日本に戻る事がなかったのだ。

そして、長い沈黙を破つて池澤が本を出した。それがまたよりによつて直木賞に選ばれたのだ。

池澤の「殺意」は八王子の離れ屋の生活を赤裸々に書いたものだった。それには、真琴の家庭内暴力を事細かに書かれていた。池澤は自分の立場で真琴の深層心理を描いたつもりだったが、比呂志にしてみれば、それは単なる暴露本にすぎなかつた。

大事な息子の存在を無視するかのようについた池澤を比呂志は許すことが出来なかつた。それというのも、真琴は比呂志の分身だからだ。

比呂志は真琴の面倒を実に良くみていた。特に真利子が池澤と夜を過ごす時は必ずといつていいほど真琴のオムツやミルクの世話を完璧にこなした。比呂志は嫌な

顔一つしないで、それをやってのけたのだ。気が着けば、すっかり真琴はお父さん子になっていた。比呂志と毎晩、風呂に入り二人で床につく生活を十年ほど続けていたのだ。

真琴が昼は真琴の母親を演じ、夜は池澤の女になる真利子を毛嫌うようになったのは中学生になった頃からだった。それは池澤に対しても同様だった。真琴は十歳ぐらいまで「おじちゃん、おじちゃん」と池澤を呼んでいたが、十三歳になると別人のように暴力をふるうようになっていった。この暴力はまるで、比呂志の長い間の鬱憤を晴らすかのように激しく、子供の暴力とはおもえぬほど周到なものだった。

離れ屋のあの二階の窓ガラスが割れ、壁は血に染まり、畳は擦り切れ、見るも無残な離れ屋に変わり果ててしまった。この地獄から抜け出すには、真琴をどうにかするしかないと考えた比呂志は、真琴が十五歳になると嫌がる真琴を無理やりアメリカに留学させたのだ。

比呂志は真琴には絶対に池澤が書いた『殺意』は読ませたくないと思つた。そんな比呂志の願いも空しく、真

琴はアメリカでその本を読んでしまったのだ。

三

「それにしても、誰が池澤の死体を持ち出したのだらう」と比呂志は頭を抱え込んだ。

「華奢な真利子がひとり運べるわけがない。死体処理会社のサングラスをかけた一人の作業員が持ち出したのだらう」と呟きながら、部屋の中を比呂志はもう一度くまなく探してみた。

この古ぼけたアパートの二階にある一番奥の部屋には、まるくたたまれた寝袋がポツンと一つあるだけで、他にはなにもない。

比呂志は湿った畳の上に落ちているテキストを拾うと再びページを開いた。

そして小声で読み返すと納得したように「成田、シアトル、スターバックスで十七時、今日の五時か」と確認すると慌てて寝袋を持って部屋を出た。

いつのまにか、外はすっかり良い天気になっていた。

アパートの錆付いた手すりが眩しい日差しを受け赤茶色に醜さをさらけ出していた。吹き溜まりとなった階段下には、汚れた古い青いビニールシートが、時折吹く強風にガサガサと音をたてて揺れている。

比呂志はその中にねずみ色と黒の真新しい寝袋を無理やり押し込むと、なにくわぬ顔をして新大久保から歌舞伎町を小走りで通り過ぎ、新宿の東口に着いた。

新宿から成田エクスプレスに飛び乗り、四時三十分には成田国際空港の第一ターミナルにあるスターバックスに着いた。

「ここにいれは、何かが分かる。誰が池澤の死体を持ち去ったか。きつと分かる」と何度もそう呟くと、比呂志はマフィンとコーヒーを注文した。そして、十分もしないうちに、また同じものを注文した。その日は朝から何も食べてなかったのか比呂志はここで空腹を満たした。

時計が六時を指した。

真利子はいまだに現れなかった。比呂志はあたりを何度も見渡したが、飛行機の出発時間が気になりスターバックスをあとにした。

比呂志は出発ロビーに早足で行くとノースウエストのカウンターに目を向けた。大勢の人の列を何度も目で追った。

「真利子は成田にこないのだろうか」

比呂志は諦めた顔をしながら、黒のショルダーバックを肩にかけなおした。

「お客様のお呼び出し申し上げます。八王子市にお住まいの田村比呂志様、お連れ様が第二駐車場にてお待ちです」と館内放送が流れた。比呂志は一度目を聞きそびれ、二度目で自分が呼ばれていることが確認できた。

比呂志はゆっくりとオオム換えしのようにそれを真似て呟くと、諦めていたものがふつつつ湧き上がってくるのを感じた。

「真利子に会える」と比呂志は声を上げた。

そしてエスカレーターを探すと到着ロビーに降りた。比呂志は小走りで外に出ると第二駐車場に急いだ。

あたりはすっかり暗くなっていた。平日の駐車場には、車も疎らで人影もなかった。比呂志はこの駐車場を速足で歩き回ると、一番奥にポツンと置いてある車のヘッド

ライトが点滅しているのを見つけた。

「あの車だ」と比呂志は叫んだ。そして、近づいてみると車には誰もいなかった。比呂志は慌てて車の後ろに回るうとした。すると「お父さん」と真琴の声がした。

比呂志は「真琴」と叫ぶと、すぐに声のするほうに向かったが、そこには真琴の姿はなかった。

比呂志はもう一度、さっきの車に戻ろうと黒のショルダーバックを肩にかけ直すと走り出した。

四

真利子は比呂志がスターバック스에置き忘れた小説教室のテキストをシアトル行の飛行機の中で読んでいた。ノースウエスト9便シアトル行きは定刻の十九時に成田国際空港を離陸した。ビジネスクラスのキャabinは食事のサービスも終わり、落ち着いていた。読書灯がスポットライトのように幾つかの席を照らしていた。

「ねえ、ここに書いてあるウェブサイトにアクセスする

とほんとうに死体を処理してもらえるのかしら？」

真利子は隣に座っているマリナーズの野球帽を深めにかぶった真琴に話しかけた。

「やってみればいいよ。しかし、その本、面白いだろう。」

スターバックスに置いてあったんだ」

「ほんとうね。いい暇つぶしになるわ」

「シアトル到着まで、まだ六時間もあるからゆっくり読めるよ」

「そうね」と言うと、真利子は老眼鏡を親指と人差指で挟んでかけ直した。そして、フットレストに足を伸ばすと続きを読み始めた。

『十月十二日 十七時

約束をした時間に真利子はスターバックスに現れた。

私は十六年ぶりの再会に戸惑った。それは真利子の顔に深いシワができ、真利子の髪はすっかり灰色になっていた。それでも、笑った顔は十六年前と同じで、右頬にエクボができた。そして、笑い声は電話で聞いている真利子の声だ。

私はそんな真利子から航空券を受け取ると携帯電話を黒いシヨルダーバックから取り出して、メールをチェックした。

私は池澤の他にも、死体処理の依頼をしていた。メールには、最後の依頼となる死体処理の受け渡し場所を連絡するようにと書いてあった。

死体処理にお困りの方は、「<http://www.HANDLECORPSE101204.com>」のウェブサイトにアクセスすれば、その日のうちにお伺いします。突然、舞い込んだこんなメールにはご注意ください！

日ごろから殺意をお持ちのあなたは特にご注意ください
さい 完 』

真利子は読み終わるなり、「真琴。あんた、池澤と比呂志を殺したのね」

「いいや、殺してなんかないよ。なんで俺が殺すんだよ。殺したいと思っただけ」

「本当にやっていないのね」

「ああ」

真琴はほくそえみながら答えた。

すると真利子はテキストをぎゅっと握りながら、真琴の顔を覗き込んだ。そして「こんな小説書いて、どうゆうつもりなの」と眉を吊り上げた顔をして真琴をたしなめた。

「俺には、こんな面白いこと書けないよ」

「何、言っているのよ」

「まあ、死体処理のことはさて置いて、これは池澤の書いた『殺意』のパロディーみたいじゃないか」と真琴はぼろぼろになった本を真利子に見せた。

「真琴。それ『殺意』じゃない」

「みんなが殺意を持っているにもかかわらず、みんなが殺されてもいいと思っっている。池澤の書いた『殺意』に似ているだろう」

「そうね。確かにその通りね。あのころの私たちは、みんながそれぞれを殺したいと思っっていたし、みんな殺されたいと思っっていたわ」

「だからさ、この小説は池澤が書いたということもありえるわけだよ」

「そんなばかげたことはないわ。池澤はそんな人じゃないわ」

「お母さんはいつもそうだ。池澤を庇ってずっと生きてきたんだ。もう、池澤を庇うのはやめなよ。あいつは死んだんだ。それも自分から、だから自分で自分の始末したんじゃないの」

「そんな、馬鹿な。そんなことはないわ。それなら、この小説は池澤が書いたというの」

真利子は突然、顔を両手で覆いながら泣き始めた。

真琴は慌てて真利子をなだめた。

「今のは、冗談だよ」

真利子は少し気を持ち直すと、乱れた髪を押さえながら話し出した。

「比呂志が池澤を殺したのね。この小説は真琴が比呂志から計画を聞いて書いたんでしょう。それで、私のところに突然電話をしてきて、アメリカに一緒に行こうなんていってきて、比呂志と二人で仕組んだんでしょう」

「そんなこと言って、考えすぎだよ」

「真琴。比呂志は死んでいないのね。そうでしょう」

「お父さんが死んだなんて言っていないじゃないか。この本にも書かれていないよ」と真琴は笑いながら答えた。

「と言うことは、次に殺されるのは私なのね」

真利子は殺されることを待っているかのように言ってきた。

「察しいいいね。真利子。次は君の番だよ」と比呂志の声が前の座席から聞こえてきた。

夜のフライトは闇夜の中に飛行機が消えてゆくようなそんな静けさがあった。